

ふれあい文化祭



11月8日(土)9日(日)の2日間、第26回ふれあい文化祭が行なわれました。

時折小雨が降り寒い天候でしたが、玉川幼稚園では、生花の展示や庭園出し物いっぱいのわいわい販売会、和室では、子どもたちによるお茶席が設けられ、小さな手でけっこななお手前によって真剣にお客さんをもてなし、駐車場では、うどんやら寿司、手づくりのおはぎなどの販売が行われました。

保育所でも園児や保護者、発育会の親子によるかわいい手作り作品や大作かりな作品も展示。

小学校の体育館では、小学校との協働で「桂こけ木」さんによる記念講演会が行なされました。

番組生まれのこじまさんは、ほのぼのとした語り口で落語・講演で全国に多くのファンがあり、子供の頃の自身の経験などを面白おかしく、時には実例に「人権」という難しい内容を小学生からお年寄りまでの幅広い人にわかりやすく桂木に語り、後半はめったに生では見られない本格的な落語を聞き、あつという間の1時間半でした。

講演会の後は、芸能鑑賞会も行なわれ、後方の展示場では小学校の児童、各種同好会などによる様々な作品が展示され、力作ぞろいの立派な作品をみんな熱心に見ていました。

歌老会

9月15日(月)の歌老の日に、小学校の体育館で祝賀会が行なわれました。保健所園児や小学生による演奏と歌と踊り、後輩による寸劇などを楽しもうに最後は全員で健康体操を行いました。いつまでも元気で長生きして下さい。



お月見会

11月15日(土)、恒例となった「ふれあい月見会」が開催されました。

3回目の今年、集まって来た人たちを歓えてくれたのは、初めての試みで、コミュニケーションセンターからちびっこ広場へと暗く灯りの道でした。「竹灯りロード」と名付けられたこの道は、竹を植えたて端台にし、その中にろうそくを並べて火をともしたもので、会場の各所に點かれたろうそくの灯りとともに、お月見にぴったりの感情を与えていました。



ちびっこ広場では、半身も打ち込みうどん、月見だんご、焼きポテト、焼き卵などの「おいしいサービス」がありました。そこそこで人々の顔ができ、みんな大いにしゃべり、大いに食べました。また、コミュニケーションセンター2階では、カラオケで盛り上がりいました。

あいにくの豪雨で肝心のお月さまを覗くことは出来ませんでしたが、その分冷え込みもなく、中秋のひと時をみんなで楽しむことができました。



二十四節保存

二十四節(にじゅうよはい)とは、主に関東における農業人の二十四人の高弟を二十四節と称し、また二十四節のぐりは、まさしく農業人の足跡をたどる様、漁業入とともに歩く旅とも言ふでいるようです。人々は開幕まで出向き、二十四節通りをしていましたが、容易に参拝することが難しく、それぞれ地方に各寺院の石仏を建立して参拝し二十四節通りに代えるならわしがあります。ここ桂田でも、明治のころから24体の石仏を桂田小学校の裏山に安置し、信心の対象にしてきましたが、最近では、管理も難しく、また管理者の活動問題も起きつつある中、一か所に集めてはどうかと意見が上がり、平成7年に管理看板の協力により、現在の地へ安置されることとなりました。平成20年に開幕を整備しました。松尾池のほとりに位置する、この場所は、静かに毎に開まれた場所。きっと、石仏たちも確かに安住しているのではないでしょうか。歴史の中のことだった漁業入がこんな身近で感じることも、不思議な感じがします。



7月19日(金)に、高松市内で先駆けて、組織運営の充実した、三谷地区ユニーク協議会の方々に、桂田地区ユニーク協議会の役員と各種団体の役員の方々と共に、道踏及び活動等についての研修会に参加して、色々と貴重な話を聞きしました。その中で、三谷地区は、地区住民に対しても研修会及び協議会を実施してきましたが、その中で、高松市の各地区への交付金の一元化に伴い、桂田地区ユニーク協議会も本協議会を核とした組織運営に移行して現在多くある各団体の活動を整理統合し、地元住民の意識改革と行政に頼らない住民中心のユニーク活動を行う事が必要であると思います。

桂田地区も、このまゝにもれず子育てや退職化が進展しつつある地区であります。今後田舎世代の人々の各種分野での専門的なつながりや人材を確保し若い人々の参加を促し活力ある住み良い町作りにする事が大事である思います。どうか、多くの方々にユニーク協議会の運営と活動に参加して、協力と理解をまた、より良い住みやすさをお願いしたいと思います。



う
え
た
の
秋

秋

だ
よ
り

か
わ
ら
せ
き
む
こ
う
じ

か
わ
ら
せ
き
む
こ
う
じ



藤尾神社の神泉

西桂田のシンボルのひとつでもあります・藤尾神社。

昔から、藤尾山は、御神体山として信仰されていますが、いずれも社殿が山頂にある開闢で、水の等保は谷水を汲み上げたり、山中に井戸を開いて麓ない様で汲み上げたりして、極めて困難をきたしていました。

その後、神泉地帯が発達があり、この開拓地に井戸を掘り、周囲に玉垣を作り神龜を安置させることができました。同時に、氏子の人たちの勤労奉仕により、本殿、社務所等に常磐浴場が河原に開かれました。記憶に新しいところであります。

その時、馬の名人として名の通っていた上佐山城主の三谷弥七郎景祐が呼ばれ、怪鳥通治を命じられました。弥七郎景祐は、見事この怪鳥を射ることができるので、彼は御七郎景祐時に兵庫頭の称号を授けて武具を蓄められたそうです。王佐山城(上佐山城)は、色々な山頂にあったため、見晴らしのよい守りやすく攻めににくい山城であったそうです。やがて五百年前の文明年間に赤川氏が攻めて来たとき、攻め来る際に血が流れて山頂から大木や大石などを落として壊滅したそうで、この上佐山での激しい攻防での戦闘で有名なことがあります。この記録に記されています。



松尾池

コミュニケーションセンターから、東東に位置する松尾池。松尾池といえれば松尾市、土手に並ぶ露店を眺しながら何往復もしたあげくに、朝やアイスキャンパーを買い、くじを引いて遊んだことがあります。そんな子供の頃には目にも入らなかった過ぎた水やそれをとりまく暮色の美しさが今は心を感じてくれる。日没時の「浮城記」による雨水不足を補うため、昭和25年に神内上池、松尾池、城池、立淵池を連結する「導水路」を造ったとある。恐るべし先人の知恵と行動力！導水路をたどって歩いた時、この水の不思議、大きさを忘れないためにもこの地を訪れる人がますます増えようかなと思ったので、この工夫をしていただたらと心から思いました。



藤谷陽介